

常盤台バプテスト教会 成人科

「聖書日課と分かち合い」 3月号



第49課 準備のための聖書日課

2月27日(月) ルカ6:12~16 夜通し祈るイエス

12 そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。13 朝になると弟子たちを呼び集め、その中から十二人を選んで使徒と名付けられた。14 それは、イエスがペトロと名付けられたシモン、その兄弟アンデレ、そして、ヤコブ、ヨハネ、フィリポ、バルトロマイ、15 マタイ、トマス、アルファイの子ヤコブ、熱心党と呼ばれたシモン、16 ヤコブの子ユダ、それに後に裏切り者となったイスカリオテのユダである。

弟子を選ぶ基準は、頭がいいとか財産があるとか人生経験が豊かだとか、そういう人間的な基準ではありません。祈りによって、神の御心により12人は選ばれました。主イエスは重要な時は、神さまの知恵と導きをいただくため、熱心に、時には夜を徹して祈られます。私たちを選んでくださるためにも、夜を徹して祈ってくださっています。

2月28日(火) ルカ9:43b~45 自分の死を予告する

イエスがなさったすべてのことに、皆が驚いていると、イエスは弟子たちに言われた。44 「この言葉をよく耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されようとしている。」45 弟子たちはその言葉が分からなかった。彼らには理解できないように隠されていたのである。彼らは、怖くてその言葉について尋ねられなかった。

主イエスは二度目の受難告知をしていますが、弟子たちは意味が理解できません。無理解ゆえ、何を質問していいのかわからず、主に質問することさえ恐れてしまったのでしょうか。私たちの人生には予期せぬ出来事、理解できない出来事が起こります。それによって私たちは当惑し、悲しみ、恐れます。私たちの理解力には限界があるので、神さまの大いなる力によって、いろいろな出来事を乗り越えていけるよう祈り求めることを学びましょう。

3月1日(水) ルカ11:1~13 祈るときには

1 イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。2 そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。

『父よ、
御名が崇められますように。

御国が来ますように。

3 わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。

4 わたしたちの罪を赦してください、

わたしたちも自分に負い目のある人を

皆赦しますから。

わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』

5 また、弟子たちに言われた。「あなたがたのうちのだれかに友達がいる、真夜中にその人のところ

に行き、次のように言ったとしよう。『友よ、パンを三つ貸してください。6旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです。』7すると、その人は家の中から答えるにちがいない。『面倒をかけないでください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません。』8しかし、言うておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。9そこで、わたしは言うておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。10だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。11あなたがたの中に、魚を欲しがらる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。12また、卵を欲しがらるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。13このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。』

主イエスは熱心に祈る人であったと聖書に記されています。ご自分の願いを神に訴える熱心さではなく、神の御心と御業とを、ご自分の人生の中に受け入れて生きるために熱心に祈られたのでした。大事な客のために、恥を捨て夜中に何度も門を叩き、遠慮なく求めるような熱心な祈りはとても大切です。その祈りに神は必ず応えてくださいます。

3月2日(木) ルカ 12:22~34 神の国を求めなさい

22それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。23命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。24鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。25あなたがたのうちのだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。26こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思ひ悩むのか。27野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。28今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。29あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思ひ悩むな。30それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。31ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。32小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。33自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。34あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。』

私たちは毎日、何を食べようか何を着ようかということに悩みます。しかし思ひ悩むことは全く無駄なことだと主イエスは教えています。なぜなら私たちのいのちは神の御手の中にあり、天の父を信頼していれば必要なものはすべて備えられるからです。「神の国を求め」ことこそ最も大切なことで、「あすのための心配は無用」なのです。

3月3日(金) ルカ 17 : 20~37 神の国が来る

20 ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。 21 『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」 22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。 23 『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいけない。 24 稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。 25 しかし、人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている。 26 ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こるだろう。 27 ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていたが、洪水が襲って来て、一人残らず滅ぼしてしまった。 28 ロトの時代にも同じようなことが起こった。人々は食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていたが、 29 ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降ってきて、一人残らず滅ぼしてしまった。 30 人の子が現れる日にも、同じことが起こる。 31 その日には、屋上にいる者は、家の中に家財道具があっても、それを取り出そうとして下に降りてはならない。同じように、畑にいる者も帰ってはならない。 32 ロトの妻のことを思い出しなさい。 33 自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである。 34 言うておくが、その夜一つの寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。 35 二人の女が一緒に白をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。」 36 † 37 そこで弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言った。イエスは言われた。「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ。」

主イエスが目の前にいるにもかかわらず、神の国が実現しているにもかかわらず、ファリサイ派の人々はいつ来るのかと聞いています。神の国は目に見える形では来ず、主の御名によって集められた「あなたがたのただ中にある」(口語訳)のです。

3月4日(土) ルカ 22 : 39~46 オリーブ山で祈るイエス

39 イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。 40 いつもの場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。 41 そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。 42 「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」 [43 すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。 44 イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。] 45 イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。 46 イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」

主イエスは、苦しみもだえ、汗が血の滴るように落ちても、いよいよ切に祈られました。十字架の苦しみは私たちには到底理解できません。父である神に、罪人として裁かれ切り離され見捨てられるのですから。しかし主イエスは熱心に祈ることによって御心に従う力を与えられ十字架の道へと歩んで行かれます。目を覚ましていられず眠ってしまった弟子たちの弱さもご存じで、それでも一緒に来なさいと言ってくださるお方です。

3月5日(日) ルカ18:1~8 気を落とさずに

1 イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。2 「ある町に、神を恐れず人を人とも思わない裁判官がいた。3 ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。4 裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後に考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。5 しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』」6 それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。7 まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。8 言うておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

何かショックなことや嫌なことがあると、心は平安ではなくなり、ざわざわしますよね。正しい判断ができなくなり、焦りや苛立ちも感じることもあるでしょう。そのような時は、焦らずに気を落とさずに、心に静けさを祈り求めるのがいいです。静けさと安らぎが与えられたら、考えの転換や良い判断ができるように御心を求める祈りをしてみましょう。

(担当：宇佐美 典子)

第49課 ショートメッセージ 「気を落とさずに」

聖書箇所：ルカ18：1－8

暗唱聖句：神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、
彼らをいつまでもほうっておかれることがあるか。（ルカ18：7）

今週の聖書教育誌の週題は「気を落とさずに」です。

18:1 イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された

イエスさまは、この「やもめと裁判官」のたとえを弟子たちに話されました。イエスさまの歩まれるところに常に同行していた人たちのなかにファリサイ派の人たちもいました。彼らは聖書に厳格で律法の掟を忠実に守ろうとした人たちです。掟を守ることを、律法に生きることを最重視していました。そのために相手の立場に配慮するとか、理解する寛容さがなく、ひたすら律法を法的に守ることが正義としていた人たちでした。

彼らは、いわゆる聖職者ではなく当時の社会を支えていた農民・商人・職人の人たちであり、かつ中産階級の生活が出来ていた人たちです。それゆえ、彼らの内から律法学者やサンヘドリンの議員も輩出していたのです。その彼らはイエスさまの言動・行状・生き方に対して批判を繰り返していたのです。

そんな彼らは弟子たちにとって、あるいは身近な知り合いか、面倒をみてもらったとか、よく知る人たちであったかもしれません。赤の他人なら気にせずいられたのでしょが恐らくはイエスさまとの板挟みとなり彼らを悩ませていたのではないかと思われました。

そこでイエスさまは悩む弟子たちに気を落とさず「祈り」の大切さを教えるためにこのたとえを話されました。

「祈り」についてP.T.フォーサイス著「祈りの精神」(斎藤剛毅訳)の記事をご紹介します。

「祈りによって神の御前に立つとき、人の存在は正される。意思是道徳的に矯正され、神の意思を行う力を得る。他の行為や努力が、神への奉仕において、たとえ不確かであっても、祈りにおいて正される。もし、真実に神を求めるなら、求める方法が間違っていたとしても、それは罪ではない。神は適切な方法で神の心に沿うように正してくださる。祈りは神の意思に従うことであり、祈りにおいて、人は本来あるべき場所に立つようになる」

イエスさまのたとえ話に戻ります。ここで、イエスさまは失望しないで熱心に、相手が困るくらいしつこく祈りなさいと言われていています。ここで登場する裁判官は「不正な裁判官」と言われる人でした。

18:2 ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。

この裁判官はヘロデ王かローマによって任じられた治安判事のようなのです。神を畏れない、神を神として尊ばない。もちろん祈りもしない。自分が裁く人の人格も、正義も重んじない。イエスさまが示された神を愛すること、隣人を愛することを無視した裁判官でした。賄賂を受け取ることや不正な判決をすることにも厭わなかったのです。さらに問題なのは裁判官には大きな権力があります。一度、自分で判決を決めれば、裁きを求めた人にはもうどうすることもできません。自分が神のようになって裁き、神の審きに服する必要も覚ええない。それは誰の訴えであっても正しくきちんと耳を傾けることが出来なくなっていたとも言えるのです。それは神を忘れた時の私たちの姿でもあります。

18:3 ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。

夫を亡くし、社会的に無力となった一人の女性(やもめ)が必死に訴え出ます。事情は聖書に

ありませんが夫が亡くなると、そこに力をもった人が現れて無理やり家の財産を力づくで奪ってしまうことがよく起きていたそうです。訴えてもどうにもならず、抵抗もできずに諦めて泣き寝入りするようなことが当時はよくあったのでしょうか。

18:4～5 裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後に考えた。

『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』』

この女性は諦めませんでした。それどころか何度も足を運んで、裁判官につかみかからんばかりに激しく訴え続けたのです。さすがの裁判官も根負けして彼女の訴える正義に基づいて裁くのではなく、悩まされて困りきっていたので、さっさと言うように裁いて片づけてしまおうと考えたのです。

18:6～7 それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。」

イエスさまは言われました。「この不正な裁判官もついに根負けして、訴えに有利な裁判をするとすれば慈愛に満ちた天の父なる神はもっともっと豊かに与えてくださらないことがあろうか。」この言葉には励まされます。けれども、私たちが祈ればどんなことも叶えていただけるとは皆さんもお考えにはならないでしょう。

このイエスさまのたとえで言われていることは「神の時・神の国」を待ち望む「祈り」のことです。神との出会いを祈り、待ち望む。主の再臨を待ち続ける祈りのことなのです。その神の時がいつかは私たちには分かりません。ただ、信じて祈り、待ち望む信仰こそが私たちなのです。祈る言葉は未熟かもしれません。思いが口からは適格に表せないかもしれません。誘惑に負けて祈りを時にやめてしまうかもしれません。しかし、祈り続けることでフォーサイスの言葉にあるように、私たちは正されていくのです。

18:8 「言っておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

神の時までの間、私たちには艱難や試練はあることでしょう。幸いなことに必要をすべてご存じの天の父なる神が必ず支えてくださいます。その時まで、たとえ悪の試みに遭っても気を落とさず失望せず、ひたすら祈り続ける「祈りの力」を信じる私たちであることを期待しておられるのです。

それでも私たちは現実の社会、生活に悩まされます。時として救われた喜びが挫けてしまうようなときもあります。しかし私たちは、この不正な裁判官のような世に負けずに、諦めずに神が裁いてくださることを信じ、やもめの女性のように決して挫けないで、この地上も「神の国」に満たされることを願い祈り求め続ける信仰の民なのです。祈りはイエス・キリストが執り成してくださいますから失望に終わることはありません。私たちは救われた民です。ですから、祈りは途切れてはならないのです。

参考図書:新版「祈りの精神」 P.T.フォーサイス著(斎藤剛毅訳) 2017年 キリスト新聞社

● 分かち合い

- ・ 祈れなくなることが、どなたにもあったことでしょう。分かち合い、励まし合いましょ

う。

(担当：郷 秀男)

第50課 準備のための聖書日課

3月6日(月) ルカ9:21~27 苦難の予告

21 イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、22 次のように言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」23 それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。24 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。26 わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子も、自分と父と聖なる天使たちとの栄光に輝いて来るときに、その者を恥じる。27 確かに言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国を見るまでは決して死なない者がいる。」

21節の「このこと」とは前節でペトロが答えた。「(イエス様は)神からのメシアです。」を指しています。27節の「神の国を見るまでは決して死なない者がいる。」の部分が引かかるかとは思いますが。私は24節の「わたしのために命を失う者は、それを救うのである。」に値する人がここに一緒にいる人々の中にいるという意味と読み取っています。

3月7日(火) ルカ9:51~55 エルサレムに向かう決意

51 イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。52 そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。53 しかし、村人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである。54 弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言った。55 イエスは振り向いて二人を戒められた。56 そして、一行は別の村に行った。

サマリア人はユダヤ人と異邦人の混血であり、それをユダヤ人は不純な民として軽蔑をしていたので、「どうせお前達もユダヤ人同様に私達を軽蔑しているのだろう」となってしまったと想像できます。54節のヤコブとヨハネの言葉、「天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」。9章初めにイエスさまが十二人の弟子たちに「あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気を癒す力と権能」をお授けになっていたのです。これを行うことの出来る力が自分たちの内にあると感じているからこそその発言なのではないでしょうか？勿論その力は「イエスさまの名によって」でしか成し得ない力です。

3月8日(水) ルカ21:5~6 神殿の崩壊

5 ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。6「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」

時は違えど、預言者エレミアも同じようなことを預言しました。日本の立派な神社や寺院などに対して面と向かって言っても怒りを買いますが、民全体で信仰している神さまの神殿となると更に神聖なものであったと想像できます。エレミア同様に迫害を受けてもおかしくない場面でしたが、今回の相手はイエスさまを先生と慕う方でした。

3月9日(木) ルカ 21 : 20~24 エルサレムの滅亡

20「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。21 そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ち退きなさい。田舎にいる人々は都に入ってはならない。22 書かれていることがことごとく実現する報復の日だからである。23 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。この地には大きな苦しみがあり、この民には神の怒りが下るからである。24 人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれる。異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。」

この箇所は「この世の終わり」、「解放の時」、「神の国」が近づく徴（しるし）について話している中の1つです。

3月10日(金) ゼカリヤ書 9 : 9~10 ゼカリヤの預言

9 娘シオンよ、大いに踊れ。
娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。
見よ、あなたの王が来る。
彼は神に従い、勝利を与えられた者
高ぶることなく、ろばに乗って来る
雌ろばの子であるろばに乗って。
10 わたしはエフライムから戦車を
エルサレムから軍馬を絶つ。
戦いの弓は絶たれ
諸国の民に平和が告げられる。
彼の支配は海から海へ
大河から地の果てにまで及ぶ。

イエスさまのエルサレム入城を預言された箇所です。「平和の君」と云われる所以です。

3月11日(土) マルコ 11 : 1~11 マルコが記す入城

1 一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、2 言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。3 もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」4 二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどいた。5 すると、そこに居合わせたある人々が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。6 二人が、イエスの言われたとおり話すと、許してくれた。7 二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。8 多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。9 そして、前に行く者も後に従う者も叫んだ。

「ホサナ。
主の名によって来られる方に、
祝福があるように。
10 我らの父ダビデの来るべき国に、

祝福があるように。

いと高きところにホサナ。」

11 こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入り、辺りの様子を見て回った後、もはや夕方になったので、十二人を連れてベタニアへ出て行かれた。

イエスさまの生涯を描いた多くの映画で必ず出てくる場面です。この後、このエルサレムで多くの苦難を受け、人の子としての人生を終えられることを知っているイエスさまの悲しげな表情と喜び祝う弟子や群衆と対比して演出している場面が目には浮かびます。

3月12日(日) ルカ 19：28～40 主がお入り用なのです

28 イエスはこのように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。29 そして、「オリーブ畑」と呼ばれる山のふもとにあるベトファゲとベタニアに近づいたとき、二人の弟子を使いに出そうとして、30 言われた。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、引いて来なさい。31 もし、だれかが、『なぜほどくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」32 使いに出された者たちが出かけて行くと、言われたとおりであった。33 ろばの子をほどいていると、その持ち主たちが、「なぜ、子ろばをほどくのか」と言った。34 二人は、「主がお入り用なのです」と言った。35 そして、子ろばをイエスのところに引いて来て、その上に自分の服をかけ、イエスをお乗せした。36 イエスが進んで行かれると、人々は自分の服を道に敷いた。

37 イエスがオリーブ山の下り坂にさしかかられたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。

38 「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。

天には平和、

いと高きところには栄光。」

39 すると、ファリサイ派のある人々が、群衆の中からイエスに向かって、「先生、お弟子たちを叱ってください」と言った。40 イエスはお答えになった。「言っておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす。」

「主がお入り用なのです」、自分に向かって言われている言葉と捉えると意味が違ってきます。子ろばのような小さくて足りない者であっても神さまが必要として下さるところに大きな喜びがあります。「石の叫び」とは、「無理やり押さえつけられたり、自由を奪われたりしている人々の中から沸き起こる魂の叫び」、「押さえても押さえてもあふれ出てくる自由への叫び」と言われています。

(担当：栗山 義亜)

第50課 ショートメッセージ 「主がお入り用なのです」

聖書箇所：ルカ19：28－40

暗唱聖句：イエスはこのように話してから、先に立って進み、
エルサレムに上って行かれた。（ルカ19:28）

「エルサレム入城」は、日曜日に起こりました。教会暦においては「棕櫚の主日」「枝の主日」などと呼ばれ、特別な礼拝を捧げたり、飾りつけをしたりと、地域や教派によって様々な過ごし方をします。今年は、4月2日がその日に当たりますので、もう少し先ですね。

ルカ福音書においてこの出来事は19章の終盤に書かれ、イエスさまが十字架にかかれるのは23章の中盤です。それだけエルサレム入城後にも多くの出来事があり、また多くの大切な御言葉が語られているのですが、日数でいえば入城から十字架は僅か5日間です。数日先にご自身に待ち受ける出来事をご存じで、後に「御心なら、この杯をわたしから取りのけてください」（22：42）とまで祈られたイエスさまが、「先に立って進み、エルサレムに上って行かれた」（19：28）ことの凄味を思わずにられません。

さて、イエスさまは2人の弟子を遣わして、小さなろばを連れてこさせました。エルサレムに入るにあたり、徒歩でもなく、王や権力者が乗るような立派な馬でもなく、言わばその中間とも言える小さなろばを選ばれるイエスさま。この「中間」ということが、神の子でありながら、人として歩まれたイエスさまを象徴するように思えます。

また、ろばに乗るということはゼカリヤ書の預言が成就する意味合いもありました。

**見よ、あなたの王が来る。/彼は神に従い、勝利を与えられた者
高ぶることなく、ろばに乗って来る/雌ろばの子であるろばに乗って。
わたしはエフライムから戦車を/エルサレムから軍馬を絶つ。
戦いの弓は絶たれ/諸国の民に平和が告げられる。**

子ろばに乗ることによって、イエスさまは高ぶらない方であることが表され、また軍馬を絶ち平和を告げる方であることが示されるのです。

さて、この一連の出来事を私たちの人生に重ねる時、3つの立場から読み解くことができるでしょう。

一つ目は、子ろばと私たちを重ねる読み方です。一見無力な子ろばを必要としてくださる、ということが、弱い私たちをも主が用いてくださる、と理解できるのです。子ども讃美歌「私たちはロバの子」はまさにそのような視点に立った讃美歌です。

私たちはロバの子です/馬のように速く走れない/ライオンのような力なんか無い
ただのちっぽけなロバの子です
だけどあなた知っていますか/ロバが主のお役に立ったこと/
イエスさまを背中にお乗せして/エルサレムにお連れしたことを
走れなくても強くなくても/いつもイエスさまがいてくれます
私たちはロバの子です/神さまのために働きます

二つ目は、イエスさまから命令された弟子と、私たちを重ねる読み方です。聖書の中に弟子たちの心情までは書かれていませんが、「本当にイエスさまの言う通り、この先にろばがいるのか?」「そもそも何故、子ろばなのだろう?」と疑問を持って不思議ではありません。しかしイエスさまのお言葉だから、そのままに従う。自分の中の常識は脇に置く。私たちが主に従い、奉仕していくとき、とても大切なことではないでしょうか。

そして三つ目は、ろばの持ち主と、私たちを重ねる読み方です。持ち主については「なぜ、子ろばをほどくのか」という言葉が聖書に記されており、戸惑ったことは明らかです。しかし、「主がお入り用なのです」との言葉を受けて、子ろばを連れ出すことを了承しました。「なぜ」と戸惑うこともイエスさまはお見通しであった、という点も含めて実に神さまと私たちの関係を象徴しています。主が必要とされるものは全て、戸惑いや憂いを捨てて差し出すことのできる自分でありたい、と願います。

これからの生き方について、礼拝出席や奉仕について、あるいは捧げものについて等、主からの示しを感じながらも、自分の思いに阻まれ 100%の応答ができないと感じる時が誰しもあると思います。しかし冒頭で触れた、この先に待ち受けることを知りながらエルサレムへ進み行くイエスさまの姿を思い起こしましょう。正にイエスさまご自身が、私たちに手本を示してくださっているのです。自分の思いはどうあれ、神のご計画には真っすぐ、忠実に従っていくという手本を。

イエスさまを迎えた群衆は、王を迎える時と同じように道に服を敷いて歓迎しました。人々の群れは 1.5km ほどにもなったそうです。いかにイエスさまの評判が高かったのかを示す話ではありますが、群衆の中には数日後に「イエスを十字架にかけろ」と叫んだ人も多く含まれています。「石」のように抑圧されてきたユダヤの民は、新たな生活や秩序へと解放してくれる指導者のように、イエスさまを捉える傾向がありました。神の子、救い主としてのイエスさまに気付いていなかったのです。

私たちは、イエスさまがどのようなお方であるかを知り、従い生きる恵みの中にいます。十字架をも受け入れ、進み行かれたイエスさまの姿に倣い、私たちも精いっぱい応答をしてまいりましょう。

● 分かち合い

- ・ 御言葉によって憂いや葛藤を乗り越えた経験について、分かち合いましょう。
- ・ イエスさまの姿に倣う、という点で大切にしている御言葉を分かち合いましょう。

(担当：郷 健人)

第51課 準備のための聖書日課

3月13日(月) 創世記1:27~31 被造世界の祝福

27 神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

28 神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

29 神は言われた。

「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。30 地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」

そのようになった。31 神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

神さまは御自分にかたどって人を創造され、祝福して全てを支配するように言われました。被造物の一つ一つが本来の目的を果たせるように治め、全てが最善(平和)の関係に生かされることを託されました。「見よ、それは極めて良かった。」神さまのご計画そのものの実現です。個々の存在が良いだけでなく、全体の繋がりも良く、全体と神さまとの関係も良かったことを強調しておられる様で、人をいかに慈しんで造られたかを改めて教えられます。

3月14日(火) イザヤ5:1~7 ぶどう畑の歌

1 わたしは歌おう、わたしの愛する者のために

そのぶどう畑の愛の歌を。

わたしの愛する者は、肥沃な丘に

ぶどう畑を持っていた。

2 よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。

その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り

良いぶどうが実るのを待った。

しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。

3 さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ

わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。

4 わたしがぶどう畑のためになすべきことで

何か、しなかったことがまだあるというのか。

わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに

なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。

5 さあ、お前たちに告げよう

わたしがこのぶどう畑をどうするか。

囲いを取り払い、焼かれるにまかせ
石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ
6 わたしはこれを見捨てる。

枝は刈り込まれず
耕されることもなく
茨やおどろが生い茂るであろう。
雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。

7 イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑
主が楽しんで植えられたのはユダの人々。
主は裁き（ミシュパト）を待っておられたのに
見よ、流血（ミスパハ）。
正義（ツェダカ）を待っておられたのに
見よ、叫喚（ツェアカ）。

他に何もすることが無い位に至れり尽くせりの準備をし、良い実を期待したのに・・・。神さまは恩寵による贖いの御業によって、乳と蜜の滴るカナンの地にイスラエルの民を導き入れて下さったのに、彼らはその恵みに応えることができず厳しい裁きが再度及ぶことが暗喩されます。私を創造された時から、全てを整え愛で満たして下さっておられるのに、恵みを数えることや感謝の足りなさを教えられます。

3月15日（水）詩編 118：22～25 家造りらが退けた石が

22 家を建てる者の退けた石が
隅の親石となった。
23 これは主の御業
わたしたちの目には驚くべきこと。
24 今日こそ主の御業の日。
今日を喜び祝い、喜び躍ろう。
25 どうか主よ、わたしたちに救いを。
どうか主よ、わたしたちに栄えを。

自分達の利権のためにも先頭に立って政治的に力強くリーダーシップをとってくれる王様を期待していたイスラエルの人々にとって、イエスさまは全くタイプが違う(何だ！この人では無かったのか・・・)とまで思いました。でも本当はこの方が、考えられない方法で私達を罪の重荷から解放してくださり、考えも及ばない知恵と力で批判をかわし、罽を潜り抜け、病むものを癒し、弱いものを助け、罪人を救う正真正銘の救い主でした！ハレルヤ！

3月16日（木）イザヤ書 28：16～18 堅く据えられた礎

16 それゆえ、主なる神はこう言われる。
「わたしは一つの石をシオンに据える。
これは試みを経た石

堅く据えられた礎の、貴い隅の石だ。

信ずる者は慌てることはない。

17 わたしは正義を測り縄とし

恵みの業を分銅とする。

雹は欺きという避け所を滅ぼし

水は隠れがを押し流す。

18 お前たちが死と結んだ契約は取り消され

陰府と定めた協定は実行されない。

洪水がみなぎり、溢れるとき

お前たちは、それに踏みにじられる。」

パレスチナの建築法では、家の重量が全部そこにかかるような大きな石(土台石)をそこに置いたそうです。耐えられるかどうか良く試したものでした。この石の確実性を信じより縋っていればあわてることはない。それは具体的に例え敵の脅威にも、自衛力の強化や外国勢力との同盟などに心砕く必要がないとまで言います。何度もこのお方(イエスさま)の真実、確実性を語って下さり、私達はそのお方に守られている事を有り難く感謝いたします。

3月17日(金) 使徒言行録2:22~42 ペトロの説教

22 イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおりで、23 このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。24 しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。25 ダビデは、イエスについてこう言っています。

『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。

主がわたしの右におられるので、

わたしは決して動揺しない。

26 だから、わたしの心は楽しみ、

舌は喜びたたえる。

体も希望のうちに生きるであろう。

27 あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、

あなたの聖なる者を

朽ち果てるままにしておかない。

28 あなたは、命に至る道をわたしに示し、

御前にいるわたしを喜びで満たしてくださる。』

29 兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあると、はっきり言えます。30 ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着

かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。 31 そして、キリストの復活について前もって知り、

『彼は陰府に捨てておかれず、
その体は朽ち果てることがない』

と語りました。 32 神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。 33 それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。 34 ダビデは天に昇りませんでした。彼自身こう言っています。

『主は、わたしの主にお告げになった。

「わたしの右の座に着け。

35 わたしがあなたの敵を
あなたの足台とするときまで。』

36 だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」

37 人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。 38 すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。 39 この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」 40 ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。 41 ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。 42 彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

ヨハネは聖霊の力を予告しましたが、イエスさまの十字架と復活は、水のバプテスマが「その聖なる御名と御力によって行われる時」に、罪の赦しと聖霊が与えられることを保証しています。罪を告白し主を信じる者全てに、全くの罪の赦し、心の解放を下さったのです。私たちは自分の小さな考えで心に枷を掛けないで、素直に喜び、賛美し感謝してまいりたいです。

3月18日(土) 一ペトロ2:1~10 生きた石の上に

1 だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って、 2 生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです。 3 あなたがたは、主が恵み深い方だということを味わいました。 4 この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。 5 あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。 6 聖書にこう書いてあるからです。

「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、
シオンに置く。これを信じる者は、決して失望することはない。」

7従って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、

「家を建てる者の捨てた石、
これが隅の親石となった」

のであり、8また、

「つまずきの石、
妨げの岩」

なのです。彼らは御言葉を信じないのでつまずくのですが、実は、そうなるように以前から定められているのです。

9しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。10あなたがたは、

「かつては神の民ではなかったが、
今は神の民であり、

憐れみを受けなかったが、
今は憐れみを受けている」

のです。

イエスさまは人々に捨てられました。でも私たちは、主が知恵が深く弱い者の味方で心身の病を癒され、粹にはまらない機転をお持ちのお方だということ、神さまにとっては選ばれた尊い生きた石であることを知っています。

私達も悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口などを(主によって)取り去っていただき、日々証する生きた石と成長させていただけたら幸いです。

3月19日(日) ルカ 20:9~19 ぶどう園はだれのものに

9 イエスは民衆にこのたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た。10 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。ところが、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせないで追い返した。11 そこでまた、ほかの僕を送ったが、農夫たちはこの僕をも袋だたきにし、侮辱して何も持たせないで追い返した。12 更に三人目の僕を送ったが、これにも傷を負わせてほうり出した。13 そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』14 農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』15 そして、息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった。さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。16 戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」彼らはこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。17 イエスは彼らを見つめて言われた。「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。

『家を建てる者の捨てた石、
これが隅の親石となった。』

18 その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」 19 そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。

ここを初めて読んだ頃の感想は、「僕を袋叩きにして何も持たせないで追い返した？」二人目も、三人目も、跡取り息子も……。に「エッ!」「エッ!」と「まさか!」の連続でした。

律法学者たちの言葉へのイエスさまのお返事から、自分達のことを言われていると気付いてもなお、イエスさまを陥れようとする彼らの頑なさに、どうしようもない私達人間の業の深さと共に、人知を超えた神さまの救いのご計画の偉大を改めて教えられます。

(担当：渡部 和子)

第51課 ショートメッセージ 「ぶどう園はだれのものに」

聖書箇所：ルカ20：9－19

暗唱聖句：家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。（ルカ20：17）

「ぶどう園と農夫」のたとえ、として語られる今回の聖書箇所ですが、寓喩的聖書解釈は聖書において数多く存在し、聖書は私たちにわかりやすく神さまのみ言葉を伝えてくださいます。イエスさまの語られた譬えの話は、現代に生きる私たちに向けた、厳しくも愛に溢れた神からのメッセージであることを、真摯に受け止め受け入れなければならないと思います。

ルカによる福音書を記したと言われているルカは、時間的概念において、救いの歴史の神学者と表現されることがあります。神の救いには、初めと中心と目的（結末）がある、とルカは語っていたと言われます。中心とは即ち「イエスの時」であり、初めは「旧約の時」であると共に「預言の時」でもあります。そして「預言の時」の成就是「イエスの時」です。

「イエスの時」とは、救いの時でもあり、預言の成就の時ではありますが、成就が完全に完了し完成した時ではなく、人間にとって『その時』がいつ来るのかは、未知なるものであり、正に私たちは『その時』に向かって信仰の道を導かれていると思われま

す。しかしながら、その「しるし」の先取りとして聖書は神のみ言葉を通して、信仰の歩みの機微を語ってくださっています。

ルカ思想の特徴は、約束→成就→完成という時空意識であると言われています。

そして、ルカによる福音書にしか見られない特殊資料が採用されていることが、ほぼ確実であるとも言われています。

今回の聖書箇所は20章9節～19節ですが、最後の19節の「そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと感じたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。」は、最も重要な箇所なのではないかと思われま

す。この譬えの話は多くの皆さまがご存じだと思います。皆さまはどのようなメッセージを受け取られますでしょうか。聖書は、読むその時々において、その時置かれている状況において、常に新たなメッセージを私たちに語ってくださいます。

しかし、この19節の「民衆を恐れた」は事実を語っているのではなく、譬えを表しており、後に続くルカによる福音書22章53節にある「闇の時」がまだ20章19節の時点では訪れていないことを表しています。

「闇の時」とは、ユダによる裏切りの時で、イエスさまは譬えを話されながら、「闇の時」が間もなく訪れることもご存じでした。「闇の時」の訪れをわかりながらこの譬え話をされていたということをしつかりと踏まえて、み言葉の内容に触れていきたいと思

います。ぶどう園の主人とは、神さまのことです。このぶどう園のたとえは、イザヤ書5章1節～7節（ぶどう畑の歌）の預言を背景としています。ぶどう園やぶどうの木は、旧約ではしばしばイスラエルを象徴する言葉として用いられています。そして、農夫たちとはイスラエルの宗教指導者であり、遣わされる僕は預言者たちで、わたしの愛する息子とはイエスのことであると思われま

す。たとえ話は民衆へ語っていますが、内容は律法学者たちや祭司長たちへの当てつけであることは19節に書かれている通りです。

9節での民衆は、たとえ話を聞く証人のごとき役目をしていると思われま

「長い旅」という表現に、ルカ特有の表現の美しさを垣間見る思いがいたします。

10節～12節の三人の僕（預言者）への農夫たちの仕打ちは、段階的に凄惨を増していきます。この箇所は申命記18章15節～22節の伝承として語られており、同じくルカによる福音書11章48節～49節、13章34節にも書かれています。

神は、農夫たち（イスラエルの宗教指導者）が真理の道を歩まなくなり、さ迷い始めた時、「僕（預言者）」を遣わし、正しい道に戻ることを示唆します。ところがその預言者を、農夫たちは、迫害してしまいます。続けて神は、忍耐を持って再び僕を遣わします。しかし、またしても預言者を迫害します。この行為は神との契約の不忠実さを表しています。

13節の「わたしの愛する息子」は、ルカ3章22節にある「あなたはわたしの愛する子」という、洗礼の時の天からの声に合わせた表現であると思われます。この箇所はルカ20章1節～4節の権威についての問答でのやり取りにもあるように、イエスの権威と洗礼者の権威が結びついた表現からもわかるように、偶然の一致ではない引用であると思われます。

そして、主人の息子の殺害は、ユダヤ人によるイエスの殺害をほのめかしていると思われるます。

16節の主人が戻って来るといふ表現は、神の裁きの到来であることが示されています。「ぶどう園をほかの人たちに与える」のこの時点においては、イスラエルの宗教指導者である農夫たちの裁きも行われても、イスラエルの民すべてに裁きがあるわけではなく、「相続財産は我々のものになる」（14節）と企んでいた農夫（イスラエルの宗教指導者）のみに向けられた裁きというたとえであり、すべての人への神の裁きが到来するという預言はまだされていません。よって、厳密な論理をこの聖書箇所に持ち込むのは非常に困難であると言わざるを得ないと言ったのが見解のようです。しかし、イスラエルが他の国の手に渡ってしまうと考えるのが一般的であるかもしれません。

17節は詩編118編22節からの引用です。イエスの受難死と復活を表すものとして、使徒言行録4章11節、第一ペトロ2章7節にも見られることからルカだけの独創的表現ではありません。「石」と表現されたイエスがユダヤの指導者たちに排斥され、「要の石」となるという表現で、メシアであるイエスの復活を預言しているのです。

18節はダニエル書2章34節、イザヤ書8章14節～15節に由来しており、「石の上に落ちる者は誰でも打ち砕かれ」は、石（国）が打ち砕かれ（滅亡）エルサレムが滅亡することを暗示しています。

最初に19節が最も重要なメッセージなのではないかと書かせていただきましたが、今回の聖書箇所、「ぶどう園と」農夫のたとえば、混沌とした世の中・世界の話であり、「闇の時」を迎えなければ、その後の「光の時」は訪れることはない、現代に生きる私たちに厳しくも愛をもって語ってくださっているのだと思います。

試練と祝福は表裏一体であると共に、聖書は信仰の道の険しさ、厳しさ、暗闇をも語り、私たちにそれでもなお、神に全てをおゆだねし聴き従っていくことを、大きな祝福の御手を広げ、この身をお捧げする日を待ち望んでおられるのだと思います。

●分かち合い

- ・ 皆さまにも暗闇の中をさ迷った経験があると思います。信仰があることで乗り越えることができた経験を静思してみましょう。そして神さまと対話をしてみましょう・・・。

（担当：岩崎 秀子）

第 52 課 準備のための聖書日課

3月20日(月) 出エジプト 12:21~28 主の過越

21 モーセは、イスラエルの長老をすべて呼び寄せ、彼らに命じた。

「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい。22 そして、一束のヒソプを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい。翌朝までだれも家の入り口から出てはならない。23 主がエジプト人を撃つために巡るとき、鴨居と二本の柱に塗られた血を御覧になって、その入り口を過ぎ越される。滅ぼす者が家に入って、あなたたちを撃つことがないためである。

24 あなたたちはこのことを、あなたと子孫のための定めとして、永遠に守らねばならない。25 また、主が約束されたとおりにあなたたちに与えられる土地に入ったとき、この儀式を守らねばならない。26 また、あなたたちの子供が、『この儀式にはどういう意味があるのですか』と尋ねるときは、27 こう答えなさい。『これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである』と。」

民はひれ伏して礼拝した。28 それから、イスラエルの人々は帰って行き、主がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。

「主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである」主が救ってくれた。主に守られている。なんと心強い事でしょう。民はひれ伏して礼拝をしました。イスラエルの人々には大切な儀式になったのですね。

3月21日(火) ルカ 9:21~27 十字架を負うて

21 イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、22 次のように言われた。

「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」23 それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。24 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。26 わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子も、自分と父と聖なる天使たちとの栄光に輝いて来るときに、そ

の者を恥じる。27 確かに言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国を見るまでは決して死なない者がいる。」

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」主よ、自分を捨てきれない私を、どうかお許してください。そんな私でも、主は愛してくださいます。感謝致します。

3月22日(水) ルカ 22 : 24~27 仕える者となりなさい

24 また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。25 そこで、イエスは言われた。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。26 しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。27 食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。

「上に立つ人は、仕える者のようになりなさい」仕える者とは、その人の事を思い、働く人。イエスさまは「私は給仕する者である」と、自ら、身分の低い人となりました。

3月23日(木) ルカ 23 : 44~49 イエスの死

44 既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。45 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。47 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。48 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。49 イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。

処刑する罪を見いだせない。それを知りながら……。私たちはイエスさまを処刑してしまいました。百人隊長は「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美しました。

3月24日(金) 一コリント 11 : 23~26 主の死を告げ知らせる

23 わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、24 感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。25 また、食

その後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。26 だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

パンを取り、わたしの体である。ブドウ酒の杯を与え、わたしの血によって立てられる新しい契約である。記念としてこのように行いなさい。パンを食べ、この杯を飲むごとに、主の死を告げ知らせるのです。そして、いつまでも、わたしと共に生きていきなさい。イエスさま、感謝致します。

3月25日(土) コリント 11 : 27~34 主のからだをわきまえて

27 従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すこととなります。28 だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。29 主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。30 そのため、あなたがたの間に弱い者や病人がたくさんおり、多くの者が死んだのです。31 わたしたちは、自分をわきまえていれば、裁かれはしません。32 裁かれるとすれば、それは、わたしたちが世と共に罪に定められることがないようにするための、主の懲らしめなのです。33 わたしの兄弟たち、こういうわけですから、食事のために集まる時には、互いに待ち合わせなさい。34 空腹の人は、家で食事を済ませなさい。裁かれるために集まる、というようなことにならないために。その他のことについては、わたしがそちらに行ったときに決めましょう。

ふさわしくないままとは、お互いに心をあわせず、勝手に行う事です。お互い思い合い、心をあわせて祈りましょう。そうすることで、主も喜んで下さいます。

3月26日(日) ルカ 22 : 14~23 最後の晩餐

14 時刻になったので、イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった。15 イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。16 言うておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」17 そして、イエスは杯を取り上げ、感謝の祈りを唱えてから言われた。「これを取り、互いに回して飲みなさい。18 言うておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」19 それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」20 食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。

「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。21しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。22人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」23そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。

イエスさまは、弟子の一人により裏切られ捕らえられます。その時に、他の弟子たちは恐ろしくなり、逃げて行ってしまいます。一番の弟子にも「そんな人は知らない」と3度も言われます。イエスさまは、一人になり、捕えられ、侮辱され、鞭打たれて体中傷だらけになり、いばらの冠をかぶせられ、十字架を背負わされ、処刑されます。

すべてをご存知のイエスさまは、言われました。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの超越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた」

イエスさまは、これから裏切り、逃げ去る弟子たちの一人一人を信じ、愛して下さいます。今も、罪深い私の心にイエスさまは、共にいてくださり、励まして下さいます。過去にも、今も世界中の多くの人々の心に寄り添っておられます。

イエスさまの愛は、すべてを包み込むほどに大きいのです。そして、永遠です。

イエスさま、あなたの愛に、心より感謝いたします。

(担当：小沢 敬一)

第52課 ショートメッセージ 「最後の晚餐」

聖書箇所： ルカ22：14－23

暗唱聖句： 苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。（ルカ22：15）

次の主日（4月2日）から受難週が始まります。イエスさまの十字架への苦難の道です。その道を歩み出す前に、イエスさまは使徒たちと過越の食事をしたいと切に願いました。

紀元前16世紀頃、イスラエルの人々がエジプトで奴隷とされていた時、主はイスラエルの人々を救う約束をなさいました。主は事細かに食事の指示を出し、小羊の血を家の入口の柱と鴨居に塗るように言います。主は、エジプトの国を撃つとき、その血を見てイスラエルの人々の家を過ぎ越しました。こうして、イスラエルの人々は救われたのです。そして、400年以上暮らしたエジプトを脱出した彼らは、主の仰せの通りに、この日を主の祭りとして祝うことを子、孫へと伝えました。ユダヤ教では、今に至るまで大切に守り続けられています。

この大切な過越の食事を、イエスさまは使徒たちと共にすることを願われたのです。この食事はイエスさまがすべて周到に用意されたものでした。神さまのご計画であったのでしょうか。かつて、主がイスラエルの人々をエジプトの奴隷から救われたように、イエスさまが使徒たちを罪の奴隷から救い出すためのものだったのです。

「言うておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、私は決してこの過越の食事をとることはない。」（16節）、「言うておくが、神の国が来るまで、私は今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」（18節）と書かれているように、イエスさまは「神の国で過越が成し遂げられること」、「神の国が来ること」を願って、主の計画通りに十字架へ向かうのです。

イエスさまは多くの方と食事を共にしました。中には、社会的には地位が低かったり、人から避けられていたり、世間的には罪びとと思われていたりする人もいました。そういう人々と共に食事をする中で、イエスさまは「あなたを愛している」「私はあなたの友である」と示してくださいました。これは愛餐です。

また、イエスさまには多くのお弟子さんもいました。しかし、今日の聖書箇所ではイエスさまが過越の食事を共にしたのは、弟子ではなく、「使徒」たちでした。「使徒」とは「遣わされた者」です。もうすぐご自分が十字架にかかることをご存じのイエスさまは、使徒たちに自分の後を継いで全世界に福音を伝える人になってほしいと願っておられたのです。

これまで、行動を共にし、様々なことをイエスさまから教わってきた使徒たち。彼らは、イエスさまが自分たちの目の前からいなくなってしまうとは夢にも思っていません。イエスさまはご自分が十字架にかけられ、3日後に復活することをお話されていましたが、使徒たちには意味がわかっていませんでした。そこで、パンをご自分の体として、ぶどう酒をご自分の血として、使徒たちに与えることで、イエスさまの命をいただいて生きていくようにと示してくださいます。

これは主の晩餐で、前述の愛餐とは異なります。

この最後の晩餐の直後、ユダはイエスさまを裏切り、ペトロはイエスさまを知らないと言います。他の使徒たちも捕まることを恐れて隠れてしまいます。そうなることもすべてご存知でありながら、使徒たちと食事を共にすることを願われたのです。イエスさまは「人の子を裏切るその者は不幸だ」と語ります。厳しい言葉です。しかし、その裏には、イエスさまを裏切ってしまったことを悔やみ、苦しむ使徒たちの心を思いやる優しさが垣間見えます。本来、私たちはみな、「人の子を裏切る者」なのです。そのような私たちのために、イエスさまが十字架にかかってくださり、体と血を差し出してくださったので、私たちは救われたのです。

常盤台教会では、新型コロナウイルスの感染拡大により、3年間中止していた主の晩餐式を、来年度より再開することを計画しています。当たり前のように主の晩餐式にあずかっていた時は、あまり深く考えずに受けていたこともあったかもしれません。

しかし、イエスさまがご自分を犠牲にされ、ご自分の体と血をもって私たちに救ってくださったこと、イエスさまの十字架により、私たちは新しい契約の下で救いの約束を与えていただいていることを心に留め、覚悟を持って主の晩餐を受けなければなりません。

私たちが主を受け入れ、主に従って生きていくことを決心するとき、最後の晩餐は、過去の出来事ではなくなります。主は今も生きておられ、すぐに主を裏切ってしまう弱い私たちに生かしてくださるのです。その意味、恵みをもう一度思い起こして、あふれる感謝をもって、主の晩餐式にあずかりたいと思います。

●分かち合い

- ・ 常盤台教会の主の晩餐式を初めて見た時、どのような印象を持ちましたか？クリスチャンになって初めて主の晩餐を受けた時のことを覚えていますか？
- ・ 過越の食事を共にしたいと切に願ってくださるイエスさまの思いにどのように応えていきたいですか？

(担当：田中 由記子)

3/27-4/1 聖書日課

※新年度から聖書教育の構成が変わる関係で、3/27-4/1の聖書日課を今月号に掲載します。

3月27日(月) ルカ22:39~46 オリーブ山の祈り

39 イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。40 いつもの場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。41 そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。42「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」〔43すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。44 イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴のように地面に落ちた。〕45 イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。46 イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」

血がしたたるように汗を流し苦しみもだえながら祈るイエスさまと対照的に弟子たちは眠りこけています。捕らえられる前の最後の夜なのに、ひとりで祈るイエスさまのお姿に胸を締め付けられるような痛みを感じます。すべての人の罪を贖う神の小羊としてみ心を成し遂げるための、激しい祈りを私たちは忘れないようにしたいです。

3月28日(火) ルカ22:54~62 イエスのまなざし

54 人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペトロは遠く離れて従った。55 人々が屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした。56 するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座しているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。57 しかし、ペトロはそれを打ち消して、「わたしはあの人を知らない」と言った。58 少したってから、ほかの人がペトロを見て、「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。59 一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張った。60 だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。61 主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。62 そして外に出て、激しく泣いた。

ペトロ同様、私たちも弱さゆえにイエスさまを傷つけているかもしれません。それでもイエスさまは私たちのために祈ってくださり、赦しを与えてくださっています。

新生讃美歌 486 番 ああ主のひとみ、まなざしよ
三たびわが主を 否みたる
弱きペトロを かえりみて
ゆるすは誰ぞ 主ならずや

3月29日(水) エレミヤ31:31-34 赦しの契約

31 見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。32 この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。33 しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。34 そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」

は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

新しい契約は、神の教えを守ることができない人にも、罪の赦しを与えられると約束しています。その契約のしるしは、十字架で流された主イエスの贖いの血です。その血により私たちは赦され、神の愛をいただき命が与えられているのです。

3月30日(木) ルカ23:13~21 十字架につける

13 ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、14 言った。「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。15 ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。16 だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」17 18 しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。19 このバラバは、都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである。20 ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけた。21 しかし人々は、「十字架につける、十字架につける」と叫び続けた。

祭司長や長老たちのイエスさまへの妬みから、群衆を扇動し「十字架につける」の叫び声を上げています。群衆の声とそのエネルギーは恐ろしいですが、すべてイエスさまに集中して向けられているのです。人は平和を求めながら、常に戦う姿勢を崩さないということがよくわかります。

3月31日(金) 詩編22:17~19 くじを引く

17 犬どもがわたしを取り囲み

さいなむ者が群がってわたしを囲み

獅子のようにわたしの手足を砕く。

18 骨が数えられる程になったわたしのからだを

彼らはさらしものにして眺め

19 わたしの着物を分け

衣を取ろうとしてくじを引く。

この苦難の詩は、敵に囲まれているダビデ自身のものですが、主イエスの苦難の預言になっています。イエスさまが来られる約 1000 年前に、ダビデが主と同じような苦しみを経験していたとは驚きですね。人間の歴史の中で、神を恐れず正義から離れた行いを繰り返してきたことがよくわかります。罪なき神の子が絶望の淵に落ち、苦しみを受けてくださったから私たちの罪は赦されました。ここに愛があります。

4月1日(土) ヨハネの黙示録2:7 命の木の実

7 耳ある者は、「霊」が諸教会に告げることを聞くがよい。勝利を得る者には、神の楽園にある命の木の実を食べさせよう。」』

「耳あるものは…聞くがよい」耳から聖書のことばが聞こえていても、本当には（心では）聞いていないということはありませんか？神さまが発信する周波数に、私たちの受信機をチューニングして神さまからの勝利のメッセージを聞き漏らさないようにしたいです。命の木の実をいただくチャンスを逃さないために。

(担当：宇佐美 典子)



2023.3 成人科